

心
に
子
規
を
森
元四郎……………一

正岡子規の文学碑（県内篇）

（三）

高村昌雄……………一二

子規會誌

四八号
—平成三年
—月

記 録

第八十九回子規忌ならびに九月例会（第五七一回）

平成二年九月十九日（水） 正宗寺本堂

参会者六十五名

子規忌法要次第

司 会 幹事 浦屋 薫

開式のことば 副会長 金村治三郎

法要読経 正宗寺 田中義晃師

献詠批評 幹事 小泉 繁行

子規遺作朗詠

漢 詩 会員 松本 松吉

短 歌 会員 永田 茂子

俳句辞世三句 会員 村上 季隆

尺 八 会員 桐間 竜芳

焼 香 副会長 金村治三郎

遣 族 佐伯 徹也

来 賓 俊成 薫

幹事（地方代表） 塩崎 月穂

副会長 和田 茂樹

幹事 浦屋 薫

挨拶

閉式のことば

記念講演「愚庵の柿と子規——短歌革新への転回——」

幹事 越智 通敏

十月例会（第五七二回）

平成二年十月十九日（金） 正宗寺本堂

出席三十三名

浦屋薫幹事司会により開会。座談会を行う。

座談会「極堂翁を偲ぶ」

司会 幹事 三井 颯百

講師 会員 本田 三嶺子

十一月例会（第五七三回）

平成二年十一月十九日（月） 正宗寺本堂

出席二十一名

浦屋薫幹事の司会により開会。直ちに講演を行なう。

講演「露石と霽月」

幹事 足立 修平

心に子規を

森 元四郎

1. やさしい子規

小川氏大學を卒へて帰國するよし聞きて申遺す

十年の汗を道後の温泉に洗へ

明治二十九年七月頃、小川尚義に贈った子規の句です。

小川尚義は松山の人、明治二年生れですから、子規より二歳年下です。

彼は松山中学校一高一東大と進み、この年、東大を卒業したので、帰郷の前、先輩の子規宅へ挨拶に行った時、これをあげようといって、短冊にこの句を書いてくれたという。「雞頭」昭和十二年六月号「子規君の思ひ出」参照。

この句が道後温泉の「椿の湯」の男子湯の湯口の上に彫ってあります。

小川尚義に贈ったこの即吟が、今日も椿の湯に入る人の心まで暖めます。

「卒業おめでとう。永い間ご苦労さま。松山へいんだら道後の湯で疲れをお流しや。」と云っているのです。

この「やさしさ」は、子規持ち前の心です。

啓

一眞一偽一驚一喜とう／＼ほんものときまりて御入院まで相すめばとにかく安心いたし候 たゞ此上は氣長く御養生可被成候 不自由なことがあれば御申越可被下候 已上

一月二十五日夜

子規

碧梧桐 詞伯 床下

寒からう痒からう人にあひたからう

これは、明治三十年一月二十五日付で、子規が入院中の碧梧桐に送った見舞の手紙です。当時、碧梧桐は天然痘に罹り、神田神保病院に入院していました。こんなに真情溢れた手紙、しかも書き起こしの妙、まことにすばらし一文ですが、このような手紙を書かせた子規の「やさしさ」が尊いのです。子規自身が慰めらるべき病人だったので。

肺炎は死ぬる病には無之候 小生の如き結核性のものにても死ぬることに無之候 只だ屢々咯血すれば身體の衰弱を來す故可成風邪を引かぬ様に用心致し候 貴兄も其邊御注意可被成肺炎などはわけのなき病にて候へばあせらずに

御静養可然候

明治三十一年八月十月上旬に、佐藤紅緑に送った、やはり病氣見舞の子規の手紙です。佐藤紅緑は本名治六、青森県弘前市出身、明治七年生れ、昭和のはじめ、『あゝ玉杯に花うけて』の少年小説で日本中の少年を沸かせましたが、若き日は、子規の新俳句に共鳴していた俳人でした。この手紙は、富山市富山日報社内本人宛となっています。

「肺炎などはわけのなき病にて候へば」と書いている子規の心のあたたかさよ。

寄 漱 石

コレハ萎ミカケタ処ト思ヒタマヘ晝ガマ

ヅイノハ病人ダカラト思ヒタマヘ嘘ダト

思ハハ眩ツイテカイテ見玉ヘ 規

あづま菊いけて置きけり火の國に住みける君の帰ってくるかね
これは、明治三十三年六月、熊本の第五高等学校に勤めていた漱石に送った子規の手紙ですが、その本文は残っておらず、これだけの一枚の作品だけが残っています。この「寄漱石」の次、「コレハ……」と、左の短歌との間に、子規自身が書いた「あづま菊（都忘れ）」の絵がありました。「コレハ……」の子規一流のユーモア。「あづま菊……」の暖かい友情。そこらにたまらない子規の心を感じます。

此頃ハドーゾナ。何ゾ面白イ趣向デモ（食物其他）シテオ
楽ミヤ。何ゾ面白イ者ヲアゲタイト思フケレド遠イ者ヂヤ
ケレ一向ニイカヌ。アシモ痛ミニナヤマサレテ始終體ガ落
ツカヌノニ困ル。

上根岸 正岡 升

竹村黄塔（碧梧桐の実兄）が肺病で苦しんでいると聞いて、入院の直前に（明治三十三年十二月頃）、書き送った子規の手紙です。伊予弁まる出しの手紙が心を打ちます。子規より二歳上ですが、子規五友の一人で、竹馬の友でした。翌年二月一日、入院先の東京の日赤で亡くなりました。

2. わくわくする子規

明治三十二年八月二十三日のことを書いた「るざり車」という次の一文をご覧下さい。――線のところは、中略の印です。

八月廿三日快晴、風少し。朝、歌話を書かんとて歌の本など取り散らし見る。始めて田安宗武の歌を見るに萬葉調にして趣向斬新なり。實朝以後歌人無しと思ひしに俄に此人を得て驚喜雀躍に堪へず。吾は餘りの嬉しさに虚子を猿樂町に訪はんと思ひ立ちぬ。――

殊に熱き日なりければ三時過ぎて人車に載せられ出づ。三月彼岸に虚子を訪ひて風引きしこのかた、始めての外出なり。――

「太陽」を開きて江馬天江といふ翁の白き長き鬚など見居る内、虚子は子を抱きて、重し〜といひつゝ帰り來れり。

今日此頃吾の來ることを思ひまうけざりけむ驚き喜びて話す。吾も、宗武を得たる嬉しさを述べ。

妻なる人、氷はいかに、といふ。そはわろし、と虚子いふ。アイスクリームは、といふ。虚子、それも、といはんとするを打ち消して、喰ひたし、と吾は無遠慮に言ひぬ。誠は日頃此物得たしと思ひしかど根岸にては能はざりしなり。二杯を喫す。此味五年ぶりとも六年ぶりとも知らず。

ベルモットを飲む。これも十年ぶり位なるべし。

マー坊は去年三月生れなり。僅かに一二の語を解す。其他はわけの分らぬ事を父に向ひて、意味ありげに喃々なんなんと説く。いと可愛し。喜んでベルモットを飲み、盡くれば又コップを父の顔につきつけてねたる。吾も子供一人ほしく思ふ。

虚子、飄亭を呼びにやる。

又宗武の歌をおる覺えに覺えたる限りいひ聞かす。――

飄亭來る。どうして來た、といふ。宗武にうかされて來たといふ。

西洋料理をもてなさる。――

吾を送る車の門に來りし頃恰も驟雨は月夜ながらに襲ひ來りぬ。

雨は悪からず、雨曇りがいやなりといへば、飄亭は風がいやなりといふ。盆の月の善かりし事など話す内に雨の音やみければ這ひ出づ。――

車に揺られしためか、喰ひ過ぎしためか、夜の空氣に觸

れたためか、此夜、寝つきあしかりき。

〔ホトトギス 第二卷第十二號 明治32・9・10〕

本文はじめの「歌話」というのは、「日本」(一部は「日本附録週報」に掲載)に掲載の子規の文のことで、同年七月二十六日から九月四日までの十二回執筆。その第八回(八月二十四日付)の記事のはじめに、

田安宗武の「天降言あもちりごと」といふを見てわれはいたく驚きたり。

とあります。その、「われはいたく驚きたり」が、又、子規の心なのです。つまり「驚喜雀躍に堪へず」なのです。「いいなあ、すばらしいなあ。」というようなものにお目にかかる、

子規のお得意の、「うれしくて、たまらん」ということになるのです。子規の、その日の、「うれしくてたまらん」は、田安

宗武の歌についてでありました。彼は八代將軍徳川吉宗の次男で、江戸城田安門内に住んでいたの田安宗武といひます。十萬石を与えられ、加茂真洵に歌を学び、万葉調の歌を詠み、その歌は師真洵を凌ぐといわれています。そのような歌人を知った子規はうれしくてたまらん、ということになり、その喜びを誰に分かとうか、ということになって、思いついたのが、五か月ぶりの虚子宅訪問です。虚子宅には、去年三月二十一日に生れた長女真砂子(「マー坊」といふ)がいて、その写真を撮りに写真屋に行っていて、あいにくと虚子は不在。しばらくして帰って來た虚子に田安宗武の歌のことを話す。まだ話し足りず、五百木飄亭を呼びにやうて、これにも話す。飄亭が、「どうし

て来た。」ときくので、子規は「宗武にうかされて来た。」と言つたと自分で書いています。このように、「わくわくする」子規を、私は又、すばらしいと思います。

さて、そのように子規をわくわくさせた田安宗武の歌とはどんなものでしょうか。

彼の歌集『天降言』には、こんな歌があります。

文月ぶんづき佃いん辺べにて

真帆ひきてよせくる舟に月てれり楽しくぞあらむ其その舟人は
という歌です。佃というのは、隅田川の川口にある小さな島です。季節は文月で七月です。東京湾、初秋のウォーターフロントでの景です。私も、いい歌だなあ、悠揚迫らぬ王者の歌だなあ、と思います。ちなみに、「真帆」というのは、帆を正面に向け、その全面に風を受けることです。

又、子規が明治二十八年、日清戦争従軍記者として御用船で帰国途中大咯血、神戸で療養中、小康を得た時の句に

須磨

六月を奇麗な風の吹くことよ

というのがあります。

こういう作品を読むと、私までわくわくします。

前後しますが、田安宗武のことについて、つけ加えたいことがあります。

私は、田安宗武の『天降言』を、『日本名著全集』の第二十卷『和文和歌集』の(上)でよみました。その本の解説(窪田空

穂氏執筆)に

「田安宗武の魅力はどこから来るか。彼は老いるまで、少年の持つ驚異の情を失わなかった。——そしてその情をおしして物を詠み出した。魅力とはそれである。

彼の調はさわやかだ。本来、古代を愛している彼だ。土台はおのずから素朴だ。その素朴に、この驚異の情が加わって来ている。単純と明るさとのあるのは自然である。——彼の歌を讀んで、生れ来った歌人だと思はせられるのは、主として、この驚異の情をもっているところである。——」

窪田空穂氏のいう、田安宗武の魅力である「驚異の情」——それは、そのまま子規の魅力でもある。だからこそ、子規は田安宗武の歌に感じ入ったのであります。そして、その歌の明るさについても、次に考えてゆきたいのです。

3. 明るい子規

神鳴のわづかに鳴れば唐茄子たうなすの

躰みとられじと葉隠れて居り

正岡子規

この歌は、「鳴神」八首の一つとして、明治三十一年八月三日、新聞「日本」の紙上を賑わした作です。子規自ら、これを「狂体」と称して載せました。唐茄子はカボチャ。同日八首の中には

鳴神の落ちしてふ杉の迹見れば

あわてふためき掻き上りけむ
というのもあります。

さきに、窪田氏は、田安宗武の驚異の情をもって、生来の歌人だといいましたが、子規の明るさも、生来のものと言いたいのです。

子規の作品に「明治卅三年十月十五日記事」という、長い日記風の文があります。その一部を次に引用してみます。

繻帯後のくたびれにて又枕に就く。今日は暖かなれば此室の掃除をなさんは如何、と母問ふ。余同意す。母は坐敷に寢床を設けて、余に、移れ、といふ。距離僅に一間許りなれど千里を行くの思ひして、容易には思ひ立たれず。やがて思ひ立つて身を起し辛うじて四つ這ひになる。されど左の足は痛みて動かず。左の膝子節の下に「足の蒲團」といふ一尺ばかりの小蒲團を敷きて其儘一分刻みにずり行く。敷居の難所を越えて、一間の道中恙無く、坐敷の寢床に著く。蒲團の上に這ひ上りて、今度は足を障子に向けて北枕に寝ぬ。珍しき運動に腹俄に減りたる心地して嬉し。母は掃除せんと籌持ちしまゝ病室の端にイみて、外をながめながら、上野の運動會の聲が聞えるよ、と獨り言をいふ。——母は羊羹を持ち來りて小刀にて切る。二切を食ふ。母も食ふ。時計十二時を打つ。

又筆を取る。終に秀眞の鑄物日記に到る。これが今度の蒐集日記の第一等なり。面白く趣味ある材料の充実したる上に、書き方子供らしく眞率にして技術家の無邪氣なる處善くあらはれたり。書き直すに及ばず。二三個處字を直し

て、それにて全く總ての日記の入手終る。嬉しく。

母を呼んで、もう寝る、といふ。妹は湯の勞れにて早く寝たりと覺ゆ。母は病室に敷きある蒲團の上に更に毛布を敷きなどす。余は再び病室の方に這ひ戻りて蒲團に上るや否や頭を枕の上に安めて、口の中にて、極樂、といふ。日記の入手すみたるが馬鹿に嬉しきなり。母は余が枕元に背の低き角行燈をともし置き、坐敷の方の硯箱、原稿など片づけて寝に就く。

羊羹のためにや口の中苦し。一時を聴く。

(自筆稿「ホトトギス」第四卷第二号(明治33・11・20))

子規さんは、六歳の時、父に死別しましたから、当時、母(56歳)子規(34歳)律(31歳)の三人家族でした。そのお家のさまが、見るが如くに書いてありますが、病室から坐敷へうつるのに、わずか一間(二メートル)だのにそれがなかなかかはかどらない。「敷居の難所」といい、「一間の道中」という。くるしみを笑いのオブラートにくるんで書いたのが子規のこの一文です。明るい子規の例文として挙げてみましたが、まぶしい明るさとはちがいます。しかし、「珍しき運動に腹俄に減りたる心地して嬉し」とか、「それにて全く總ての日記の入手終る。嬉しく。」「日記の入手すみたるが馬鹿に嬉しきなり。」といっているところなど、素直に、肯定的に、うれしいものをうれしい、うれしいといっていて、この人の、子供のように素直な明るさを、改めて感じるのであります。

4. 涙なみだもろい子規

子規の友人に菊池謙二郎という人がいます。子規と同年の生れで水戸の人。一高時代の明治二十二年四月三日から、吉田という友人と二人で、水戸に菊池を訪ねた記録を「水戸紀行」といいますが、残念ながら、子規らは、菊池と行きちがいになつたようです。しかし、はるばる水戸まで訪ねてゆくほどの仲だつたので、次のような手紙が残っているのです。この手紙の宛名は、京都帝国大学寄宿舎となつていて、明治三十四年一月八日付です。仙湖というのは漢詩での号です。

子規は仙湖の漢詩の添削もしていたようで、左の手紙の「別紙貴稿」というのはそのことを指しているのです。

別紙貴稿の末ニ少シもの書候處忽ち懷奮の泪にくれ申候

河東碧梧桐は昨年末結婚猿樂町廿一番地ニ住居申候 猿樂

町廿一番地とハ猶貴兄の御記憶ニ残り居候哉如何 尾谷といふ下宿屋今もありて碧梧桐寓居と隣り居候由 尾谷といふ下宿より聯想を起せば無数の記憶ハ心頭に現れ申候 貴

兄ハ何とかいふ少年と同居、小生ハ大井といふ我儘者と同居致居候 鍋焼鱈鮓ハ毎夜格子の外に來て荷をおろしたる

ことも有之候 貴兄が石井等と鯨汁を貪らうとする途端小生が嗅付たる事も有之候 貴兄若し當時を想起し玉ハハ笑

の種なるべく候 小生ハ此事を思ふ度に一度ハ笑ひ一度は泣申候

泣申候

小生近時の衰弱は身體と共に精神上に及び言語同断ゴマの事に

候 體が痛むとて泣き音を想ふて泣き未來を想ふて泣く
或時ハ死ぬるのがいやで泣き或時ハ死にたくて泣く。併シ
泣きながらも猶大食致居候 先御安心被下べく候
ふとくり言申上候 これ程の手紙又と御目にかくることも
なかるべく候 可祝

一月八日

仰臥

規認

仙湖 詞兄

涙もろい子規の手紙ですが、「小生は此事を思ふ度に一度は笑ひ一度は泣申候」、「併し泣きながらも大食致居候」など、こんなときにも、子規はユーモアというものを忘れていません。文字通りの泣き笑いです。それが、俳諧の味というものでしょうか。子規の最期の句に

糸瓜咲て痰のつまりし仏かな

痰一斗糸瓜の水も間にあはず

をとゝひのへちまの水も取らざりき

の三句がありますが、その内の前二句にも、ユーモアがあります。芭蕉の臨終の句にはそれがありません。しかし、それがよいとかわるまいとかいうことはありません。

5. 燃えつくした子規

子規没年の明治三十五年の五月五日から「日本」に連載した隨筆に『病牀六尺』というのがあります。死の二日前まで続きました。その六月三十日の記事にこんながあります。

○英雄には髀肉ひたの嘆といふ事がある。文人には筆硯ひつげん生塵せいじんといふ事がある。余も此頃「錐鏑こしを生ず」といふ嘆を起した。この錐こしといふのは千枚通しの手丈夫な錐であつて、之をかうてから十年餘りになるであらう。これは俳句分類といふ書物の編纂をして居た時に常に使ふて居たもので其頃は毎日五枚や十枚の半紙に穴をあけて、其の書中に綴込まぬ事はなかつたのである。それ故錐が鋭利といふわけでは無いけれど、錐の外うへ面は常に光を放つて極めて滑らかであつた。何十枚の紙も容易たやすく突き通されたのである。それが今日不圖手に取つて見たところが、全く鏑こしびてしまつて、二三枚の紙を通すのにも鏑こしの爲に妨げられて快く通らない。俳句分類の編纂は三年程前から全く放棄してしまつて居るのである。「錐に鏑こしを生ず」といふ嘆を起さざるを得ない。

(六月三十日)

子規の地味だが大きな仕事に俳句分類というのがあります。江戸時代の俳人の句を、くわしく、こまかく分類しています。

というわけは、単に、季題で分類するだけでなく、たとえば「月」の句だったら「月と松」・「月と芙蓉ふゆふ」・「月と菊」といふふう
に、一〇〇項目くらいに分類してあります。「雪」だったら、「雪と名所」・「雪と庭」・「雪と原野」というように約七〇項目、それをさらに細分してあります。俳句の数はそれぞれ無数で星の数ほどある。それを右の、月や雪の場合に述べたように、細かく細かく分類してゆく。しかも、終わりのない仕事で

す。無限の仕事です。今日、子規の分類してのこしたものは、『分類俳句全集』(十二巻、全部で六一〇四ページ)となつて、目にすることは出来ませんが、われわれは、その緻密さと膨大とに圧倒されます。私がざつと勘定してみると、なんと、約十二万句もの俳句が分類されています。しかも、今日の歳時記のように、季題でばつと分類するだけではなかつた。もつと細かく、細かく分類したのです。そのように分類したのを筆で和紙に書いて、錐こしで綴じこんでゆく。それを、子規は、明治二十四年から明治三十一年頃までの八年間、こつこつこつこつ続けました。月の句が七千句、雪の句が三千句、それらがつもりつもつて十二万句。それを八年間で割ると、毎日四十句余り。単に四十句余りを紙に書き写すのではなく、この句はどこに入れようかと、たくさんさんの項目の中から一か所だけ選ぶのですから大変です。そのように細かく分類して、苦勞の結果を綴じこむのです。その時は大変楽しい一時だつたと思ひますが、ある日のこと、その錐がさびていた。俺は近頃だめだなアアといつて居るのです。しかも、それが死ぬるふた月まえのことです。

子規は三十四年十一月と七日の命でしたが、その短い一生を、子規は最大の努力をつくして、生きた人です。こんな子規に私は最高の敬意をささげます。

ちなみに、「髀肉」といふのは「もも肉」のことです。「馬に乗つて戦場に赴くことのない日がつづき、ももの肉が肥えて太つたのを嘆くことを「髀肉の嘆」といいます。蜀の劉備(一六

一―二二三)の故事ですから、二―三世紀の頃のことばです。しかし、いつまでも、子規の一文を通して、このことばは生きつづけることでしょう。

子規の歌に、

吉原の大鼓聞えて更くる夜にひとり俳句を分類すわれはとか、

虫鳴や俳句分類の進む夜半

という句もありますが、それらの歌や句に、子規の完全燃焼の姿が尊くしのべれます。

以上、やさしい子規、わくわくする子規、明るい子規、泪もろい子規などと話して来ましたが、そんな子規が、その場、その場の出来心で、お天気屋のように気まぐれな言動をとったのではないかという誤解をさけるために、「錐」の話をしたのです。十二万句もの分類をこつこつとすることは、子規の持久力と辛抱を十二分に物語るものですが、そのだめおしに、もう一つの資料を御紹介しましょう。

6. つよい子規

子規の書き残したものに『仰臥漫録』という本があります。

今、本と申しましたが、生前、子規は、これを公表する予定のなかった身辺雑記のようなものです。内内の人にも見せようとしなかった病床の手記です。明治三十四年九月二日に着手して死の約半月前まで書き続けています。ここで御紹介したいのは、その明治三十四年十月十三日の記事ですが、その文の前半は省

略しましたので、そこに至る子規の文の要旨をお話します。

子規さんの家には、母と子規と妹の三人が暮らしていました。妹は近くの銭湯へ出かけていて留守。お母さんは黙って枕元に坐っておられる。丁度明日が子規の太陽暦の誕生日であるということからか、大病の子規は昂奮気味でありました。寝たきりの七年目です。子規は、話し相手がほしくなり、こんな時よく元気づけられる坂本四方太を電報で呼ぶことになり、子規が、「キテクレネギシ」と電信文をかき、母親にわたします。子規は、それを、遠い局までもっていったらいいのですが、母親は、局より近い「車屋に頼んでこう」と言いのこして出かけます。「それでも車屋ちゃんからだと困るから」という子規のことばを聞き棄ててお母さんは出てゆかれた——というような文から、次の文となるのです。

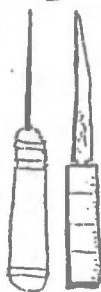
——サア静カニナツタ 此家ニハ余一人トナツタノデアル

余ハ左向ニ寝タマ、前ノ硯箱ヲ見ルト四五本ノ禿筆一本ノ験温器ノ外ニ二寸許リノ鈍イ小刀ト二寸許リノ千枚通シノ錐トハシカモ筆ノ上ニアラハレテ居ル サナクトモ時々起ラウトスル自殺熱ハムラ、ト起ツテ來タ 實ハ電信文ヲ書クトキニハヤチラトシテキタノダ 併シ此鈍刀ヤ錐デハマサカニ死ネス 次ノ間ヘ行ケバ剃刀ガアルコトハ分ツテ居ル ソノ剃刀サヘアレバ咽喉ヲ搔ク位ハワケハナイガ悲シイコトニハ今ハ匍匐フコトモ出来ヌ 已ムナクバ此小刀デモノド笛ヲ切断出来ヌコトハアルマイ 錐デ心臟ニ穴ヲアケテモ死ヌルニ違ヒナイイガ長

ク苦シンデハ困ルカラ穴ヲ三ツカ四ツカアケタラ直ニ死ヌルデア
 アラウカト色々ニ考ヘテ見ルガ實ハ恐ロシサガ勝ツノデソレト
 決心スルコトモ出来ヌ 死ハ恐ロシクハナイノデアアルガ苦ガ恐ロ
 シイノダ 病苦デサヘ堪ヘキレヌニ此上死ニソコナフテハ思
 フノガ恐ロシイ ソレバカリデハナイ 矢張り物ヲ見ルト底ノ
 方カラ恐ロシサガ湧イテ出ルヤウナ心持モスル 今日モ此小刀
 ヲ見タトキニムラ／＼トシテ恐ロシクナツタカラジツト見テキ
 ルトトモカクモ此小刀ヲ手ニ持ツテ見ヨウト迄思フタ ヨツポ
 ト手^マデ取ラウトシタガイヤ、コ、ダト思フテジツトコラエタ
 心ノ中ハ取ラウト取ルマイトノ二ツガ戦ツテ居ル 考ヘテ居ル
 内ニシヤクリアゲテ泣キ出シタ 其内母ハ帰ツテ來ラレタ 大
 變早カツタノハ車屋迄往カレタキリナノデアラウ

逆上スルカラ目ガアケラレヌ 目ガアケラレヌカラ新聞ガ讀
 メヌ 新聞ガ讀メヌカラ只考ヘル 只考ヘルカラ死ノ近キヲ知
 ル 死ノ近キヲ知ルカラソレ迄ニ樂ミヲシテ見タクナル 樂ミ
 ヲシテ見タクナルカラ突飛ナ御馳走モ食フテ見タクナル 突飛
 ナ御馳走モ食フテ見タクナルカラ雜用ガホシクナル 雜用^{ゴト}ガホ
 シクナルカラ書物デモ賣ラウカトイフコトニナル……イヤ、
 書物ハ賣リタクナイ サウナルト困ル 困ルトイヨ、逆上スル

古白日来(編注 古白日く來れ)



再びしゃくり上て泣候處へ四方太参りほとくすの話金の話
 などいろ／＼不平をもらし候ところ夜に入りては心地はれく
 と致申候

まことに鬼氣迫る文で、自殺への心の迷いを書いていますが、
 結局、子規は堪えぬきます。辛抱の子規です。強い子規です。
 そして片仮名の文です。

しかし、最後のところ、心がはればれたという所だけが平
 仮名になっています。片仮名から平仮名へ、その仮名の変わり
 ようが、同時に子規の心の変わりようをも示しています。この
 内、はじめの片仮名のところが人に迫るものが強い。しかし、
 子規はそのように、わざと書き分けたものではなく、ひとり
 にそうなっただけだろうとは思いますが、結果的には、片仮名
 の文に私はつよく心ひかれます。ここに限らず、私は、子規の
 片仮名の文が好きです。

それはともかく、このように自分の心と心が戦って、ついに
 自殺を思いとどまった子規のその意志のつよさ。それと、さき
 ほどの八年間に亘る俳句分類という、一見、無味乾燥な仕事を
 しつづけた子規の持久力。そんなことを思う時、子規さんくら
 い意志堅固で健康な人はいないのではないか、と思います。

今の若者は、肉体の健康については当然のこととも考えられ
 ますが、問題は心の健康です。

大正生れの者は宗教心が薄いなどという人がいますが、私な
 どは全くそうで、不信心といわれても仕方のない人間ですが、

その私でも、子規さんに出会えて本当によかったと思います。
心に何か迷うことがありますと、こんな時、子規さんだった
ら、どうするだろうかなあーなどと考えます。

心に子規をいだきつつ、安心して、楽しく、心ゆたかにすご
しています。

さいごにも一つ、子規さんの心を画きたいのです。

ここに、子規と虚子のやりとりした手紙があります。それを
ご覧下さい。

7. 二人のまこと

A 御手紙拜誦 北堂御病氣とかく御すくれ披成ざるよし御心配之
御事と奉存候——

近日松風會發句乱調にて小生杯ハ勿論氣にくはず先日相返し候
草稿杯ハ殆ど無點ニ候 題に束縛せられず題を取て自由自在に
いひこなす處ハ近來の上達にて感服致居候

昨日佐藤國手來り手術を受け申候 碧梧桐をたのみて來てもら
ひ候 いくら痛くとも明日より外出が出来るならば結構と心待
にまら居候處昨夜ハ己に再び腫れ上り手術も何の役にたゝぬや
うな感じ致候——

小生前日來ある人より芭蕉傳を草しくれよとたのまれ居——

其節花屋日記(芭蕉死時の日記)を取り出し見たるところ讀む
に従ひて涙と、まらず殊に去來が状を見たる其場より立ちて急
ぎ來り芭蕉と對面之場に至り嗚咽不能読少し咽喉をいたため申候
小生神戸入院以後涙もろくて病床にある時も傍に人なき折ハ時

々泪を浮へ申候 古白を想ひ出したる時など多く候 花屋日記
をよめばいつにても少しハ泣き居候へどもこの度の如く咽のい
たくなり候事ハ無之候

小生ハ感情の上にては百年も二百年も生きられるやうに思ひ居
候故に病氣のために遠大の事業をやめる杯申ことハ無之候

併シ道理の上よりは明日にも死ぬるかと存候 涙もろきも衰弱
の結果にして死期の近づきたるものと断定致候 但いくら道理
で断定しても自分ハ明日や明後日にハ迎も死ぬ事杯ハ思ひもよ
らずと存候

感情が正しきか道理が正しきかといはゞいふ迄もなく道理正し
く候 それにも拘らず感情正しきやうに思ふハ即ち凡夫の凡夫
たる所以に候 人間が凡夫でなかつたら樂もへちまもあつたも
のにハ無く候——

B 拜復佐藤國手の手術效を奏せさりし趣の御書落筆 小生も落膽
何とも可申上言葉を見出さず候 先日御手紙は甚だ小生の胸
を打ちて御返翰を認めんとせしこと両度兩度とも破り棄て申候
生自身何の故たるを知らず

感情の上にては百年も二百年も生きられるやうに思ひをり候
の一段覚えす落涙何故か小生はこの句を通して大兄に接する
の思致し申候—— 御手紙より大兄昨今御病床の模

様を想像して傍らに骨と皮にてつゝまれたる體に何か夢を見
つゝあるらしき老母の病體を見自感胸にあつたり申候 何と申
上べきか小生は小生の死なぬ間は大兄も死に玉はず母も死なぬ

やう存し候 父死せり古白死せりと人もいひ我もいひをれど尚
小生死する迄は父も死なす古白も死なぬやう存し候 併し若し
大兄死に給ひ簀笠空しく壁上にかゝるを見る時に至らば如何な
るべき——併し大兄は尚座するなり根岸におわするなり
色青く臥し給へども尚おわするなり 老母の病氣癒えたればす
ぐ様上京してすぐ様根岸へ行けは大兄はにこやかに我を迎へ給
ふなり 大兄は死に給はし大兄は死に給ふものに非ず大兄は尚
我を叱り給ふべし尚我をほめ給ふべし我母も今^今突に寝てゐるな
りゆめさめたらば薬とかすかに呼ぶなるべし其時は體温をも取
りまゐらすべしなど思ひて燈をかゝげつ

一日でも一時間でも長く御生き可被成く一句でも發句御つくり
可被成く功名などいふことはすてゝも一時間でも長生きせられ
て一句でも發句作られたきやうの希望わけも無くおこり申候—

舊三月二日夜

虚生子

子規子様 坐下

Aは明治三十年三月二十八日、東京の子規が、母の病氣見舞
に帰っている松山の高浜虚子に出した手紙です。

Bは、虚子の、その返事で、明治三十年四月三日付となつて
います。「北堂」というのは他人の母に対する敬称で、その虚
子の母は「柳」(りゅう)といました。この年七十一歳で、

翌明治三十一年十一月七日没しました。

子規は、手紙を書いていて、芭蕉と去來のことを記し、自分
とおまえ(虚子)とのことにおのずから心が進みます。又、古

白のことも思い出したり、まさに自分まる出しの子規の心が溢
れた手紙です。

それに対して、虚子も、自分のすべてを出して答えています。
思いやりはまごころです。

子規も「まごころ」、虚子も「まごころ」。ここには「まご
ころ」と「まごころ」の行き交いだけがあります。

私は、こんな手紙のやりとりをうたれます。

この時、二人は満二十九歳と二十三歳の若さでした。

「まごころ」同士のすばらしい二人に敬意をささげます。

子規さんはすばらしい人です。

思いやり深く、心やさしく、いつも少年のように心わくわく
として、いてもたってもいられない、そして常に心明るくユー
モアたっぷり、感さわまってはすぐに涙をうかべる、そして、
根氣よく辛抱して完全燃焼し、心のつよい、まごころ一杯で、
心の健康な人・子規を、私は心のよりどころとしています。

東予支部会(平成二年七月二十二日、新居浜市自彊舎)
における講演 (松山子規会幹事)

正岡子規の文学碑(県内篇)

(一二)

高村昌雄

66 春や昔十五万石の城下哉

子規

68 法隆寺の茶屋尔憩ひて

柿くへ者鐘が鳴るなり法隆寺

松山市西垣生町 宇都宮憲市邸

建立年月日不詳

松山市西垣生町 宇都宮憲市邸

高さ一一・二一cm・幅二九cm

建立年月日不詳

寒山落木(4) ② 病餘漫吟 ②①

高さ一〇・一cm・幅三〇cm

長樂寺へ入る道の手前左の角に「宇都宮憲市邸」がある。石

寒山落木(4) ② 瀬祭書屋俳句帖抄 ③

段を上がると玄關の左脇に標記の句碑がある。文字は子規の自

病床六尺 ①① 病餘漫吟 ②①

筆を拡大したもので刻まれている。

日本(明治35・8・30) 海南新聞(明治28・11・8)

67 春や昔十五万石の城下哉

子規

松山市西垣生町 宇都宮憲市邸

宇都宮邸にはこの他に

建立年月日不詳

城山や筍のびし垣の上 極堂(表裏)

高さ一〇・一cm・幅一六cm

しほのよいふなあしせと能

寒山落木(4) ② 病餘漫吟 ②①

かもめハ鷗づれ 碧(一基)

宇都宮憲市邸の裏庭にあるもう一基の「春や昔」の柱状の句

炬の火箸手にとれば火を与せ天のミ 碧(表裏)

碑である。

鐵鉢能中へも霰 山頭火(二句一基)

春風やふね伊豫に寄りて道後の湯

極堂

山川艸木皆我師

碧

などがある。いずれも拓本の採拓練習を主な目的として建てられたものようである。

69 春や昔十五万石の城下哉

子規

松山市西垣生町 高須賀石材店

建立年月日不詳

高さ一七八cm・幅三七cm

寒山落木(4) ② 病餘漫吟 ②①

前記宇都宮憲市邸の斜前にある石材店の裏入口前に立っている。

その横に、碧梧桐の

山川艸木皆我師

碧

がある。

70 柿くへ者鐘が鳴るなり法隆寺

子規

松山市西垣生町 高須賀石材店

建立年月日不詳

高さ八〇cm・幅二〇cm

寒山落木(4) ② 蕪祭書屋俳句帖抄

病牀六尺 ①① 病餘漫吟

日本(明治35・8・30) 海南新聞(明治28・11・8)

前記高須賀石材店の作業場の奥にある庭に立っている。隣には

春風やふね伊豫に寄りて道後の湯 極堂

という極堂の句碑もある。

71 出合渡

若帖の二手尔なりて上り希里

子規

松山市出合 出合橋北詰(出合荘前)

昭和八年九月

高さ二〇〇cm・幅九〇cm

寒山落木(1) ① 蕪祭書屋俳句帖抄 ③

書簡(河東兼五郎宛) ①⑧ 寒山落木抄 ②①

この句碑は前掲余戸東三丁目三島大明神にある「行く秋や

手を引きありし松二木」の句碑とともに村上露月の揮毫で建て

られた県下第一号の句碑である。

「俳句の里散策コース7」に指定されている。傍らの案内板

には、

若帖の二手になりて上りけり

東京で遊学中の子規が、松山の名所十二ヶ月を句作。

重信川と石手川の合流する「出合渡し」付近の早春

譜をなつかしく思い起こしながらその実景を詠んだも

の

明治二十五年六月十七日、当時松山にいた河東碧梧
桐にあてた手紙に「出合」と題して「若帖の二手にな
りて流れけり」として送られたが、のち「寒山落木」
に若帖の生熊から「上りけり」と推敲した。昭和八年
村上霽月書により建立

とある。礎石にはめこまれた副碑には

由来

此處出合は重信川と石手川の合流点で明治四十年旧々
出合橋（木橋）が架かるまでは渡舟で往来した此の碑
は正岡子規が伊予郡永田村の武市幡松を訪ねるに際し
渡舟の中で詠んだ句である子規を識る森河北が近隣の
俳人有志と相計り昭和八年出合橋北詰に東面して之を
建立した村上霽月翁の筆になる次に昭和十三年旧出合
橋架け替え竣工により橋詰東側に北面して移転した続
いて昭和五十二年出合大橋完成により河川敷内となる
為、余戸有志協議の上此處に移したものである。

昭和五十八年八月 余戸世話人一同

と刻まれている。

右隣に

樗さけり古郷波郷の邑かすむ 秋桜子

という水原秋桜子の句碑が立っている。また、子規の句碑の左
後方に

出合加ら手紙の末に帖の寸

伍健

という前田伍健の川柳句碑があったが、現在どこへ移したのか
撤去されている。

72 砥部焼の乳色乃なす花可め耳

うめ登椿と共に活け多り

規

伊予郡砥部町大南 砥部焼の里遊歩道入口

昭和六十年四月

高さ一五〇cm・幅八八cm

竹乃里歌 ⑥ 日本（明治33・2・11）

伊予鉄バス砥部行きで「砥部」下車、南へ約一〇〇m、「吉
岡薬品店」の角を右折、五〇mばかり行くと、左側「克心館砥
部道場」の前、「砥部焼の里遊歩道」の入口に標記の歌碑があ
る。縦三三cm、横二五cmの青磁の陶板三枚を縦につないで標記
の短歌を焼き付けて自然石にはめこんである。

「砥部焼の里遊歩道」をたどると、忠霊塔と「陶祖碑」のあ
る丘の下に

陶祖碑に立てば一望砥部小春

という河野如風の句を青磁陶板三枚焼きつけてはめこんだ句碑
がある。砥部小学校下の遊歩道には、多数の俳句、漢詩、詞な
どを俳面を添えて焼き付けた陶板が敷石として並んでいるが、
その中の一枚に、松山城の絵を添えた

春や昔十五万石の城下可哉

と焼き付けたものがある。

遊歩道を下りたところにある「陶芸創作館」の前には

陶ものに旅の歌々と書きつくる

砥部風流もおもしろきかな 勇

とやはり青磁青磁陶板三枚焼きつけてはめこんだ、吉井勇の歌

碑がある。

73 大寺の

可まどは冷えてきりくす

子規

伊予郡松前町筒井 義農公園

昭和三十一年四月二十三日（除幕）

高さ二一〇cm・幅一一〇cm

寒山落木(4) ② 病餘満吟 ②①

伊予鉄郡中線で「松前」下車、西へ約八〇mばかり行き、信号のある角を右折して約二五〇m、メゾンレスポワールの前の角を左折して約五〇mほど入ると左側に「義農神社」がある。

標記の句碑は、「義農神社」に接する「義農児童公園」にある。

「寒山落木」明治二十八年秋の句で、中七の「可まどは冷へて」が「竈は冷えて」と記されている。

義農作兵衛二百二十五回忌に建てられたもので、鶴村松一著

『伊予路の正岡子規文学碑遺跡散歩』に昭和十一年とあるのは誤りである。碑陰に「北伊予岡田松前農協」の文字が見える。

享保十七年の大飢饉に、翌年のための種麦を残して餓死した

松前町筒井の百姓作兵衛（一六八八—一七三二）の徳を讃えて

祀った（神号瑞穂建功命）のが「義農神社」である。

境内には、標記の子規の句碑とともに除幕された

吹可れ来て鴉の下里し野分哉 極堂

義農名は作兵衛と申し國の秋 虚子

の二基の他

み墓もり幾年経りぬ老松の根尔屈えは袖尔露春る 無哲
という歌碑がある。

74 五月雨や

漁婦ぬれて行くかゝへ帯

子規

伊予郡松前町筒井 松前中学校

昭和三十四年九月

高さ一三〇cm・幅八〇cm

寒山落木(1) ①

伊予鉄郡中線「松前」下車、東へ踏切を越えて約一五〇m行くと右側に松前中学校がある。校門を入ると正面に標記の句碑がある。碑陰には当時の愛媛県知事白石春樹の名がある。揮毫

・建碑とも白石春樹なのだろうか。

「漁婦」は頭上に魚を入れた桶を載せて売り歩いた女性の魚行商人のことで、「おたたさん」と呼ばれたが、この姿を見な

くなくて久しい。「かゝへ帯」は彼女たちが結んでいた帯（昼夜帯）で体の前にお太鼓に結んでいたものでこの名がある。「おたたさん」は加藤嘉明が松山築城の際、正木（現松前町）城の石を頭にのせた桶に入れて松山へ運んだと伝えられていることと知られており、その桶を「御用櫃Ⅱごろびつ」と呼んでいる。

75 門どきに

うつむきあふや百合の花

子規

伊予郡松前町神崎 北伊予小学校

昭和四十六年二月

高さ位置四〇cm・幅一九〇cm

寒山落木(1) ① 案山子集 ⑩

J R予讃線「北伊予」下車、南へ約二〇〇m、右折して踏切を越えて約二〇〇mばかりの右側に「北伊予小学校」がある。

標記の句碑は、門を入った左側の庭園の中にある。

明治二十四年六月、帰省した子規が、永田村（現松前町）の友人武市庫太（幡松）を訪ねたときの句で、「寒山落木」明治二十四年夏の項には、「幡松子の村荘を出づる時」と前書きしている。

北伊予小学校の歴代PTA会長によって建立された。揮毫は当時の松前町教育長佐伯太郎である。

76 善幾妻乃春能社尔詣希里

子規

伊予郡松前町徳丸 高忍日売神社

昭和四十六年二月

高さ九〇cm・幅一六〇cm

俳句稿 ③ ホト、ギス（明治32・5・10）

伊予鉄バスの北伊予・森松・郡中・椿宮・市坪環状線で「徳丸」下車、東へ少し行って最初の角を右折、南へ約二〇〇m、後藤商店の前の角を右折するとすぐ右側に「高忍日売神社」がある。標記の句碑は、境内右手の玉垣の前にある。赤い磨石に西山亀歩の揮毫で刻まれている。伊藤精彦の建立である。

祭神の「高忍日売大神」は産婆、乳母の祖神と伝えられ、安産、魔よけの神として信仰されている。

77 夏川を二つ渡りて田神山

子規

伊予市上吾川谷上山 宝珠寺山門前

昭和五〇年八月

高さ二二〇cm・幅三四cm

寒山落木(5) ② 松蘿玉液 ⑪

日本（明治29・8・24）

J R伊予市駅北側の信号のある角を右折、踏み切りを越えてまっすぐに約四km歩いて谷上山の山頂へ登ると、谷上山宝珠寺

の山門の前の広場に標記の句が柱状の安山岩に刻まれて立っている。元伊予市長玉本善三郎・静枝夫妻の建立である。

標記の句は「松蘿玉液」の夏川十句のうち的一句で、明治二十九年夏の作である。前書きに「昔、帰省している頃の田舎の友を訪ひたる時のけしきを思ひ出し」とある。「夏川を二つ」とは「石手川」と「重信川」のことであろうか。「田神山」は「谷上山（標高四五〇m）」の別名である。「寒山落木」には下五が「永田村」となっている。子規が谷上山に登ったという記録はなさそうである。文字は「寒山落木」から拡大されて刻まれている。

78 夕榮の五色が濱とかすみ介り

子規

伊予市上吾川 稱名寺山門前

昭和四十八年十月十日

高さ一四〇cm・幅六〇cm

寒山落木(5) ②

前記句碑のある谷上山へ登る道の途中、篠崎酒店（信号がある）の角を左折、タケチ工業ゴム鞆の向こうの角を小川に沿って右折、約一〇〇mばかり行って小川を渡り、山手へ向いて約五〇〇mばかり登ると、「稱名寺」に突き当たる。山門前右の小さな池を背にして「寒山落木」の文字を拡大して刻まれた標記の句碑が立っている。元伊予市長玉本善三郎・静枝夫妻と篠

原菊正の建立である。

子規は明治二十年、友人武市庫太と稱名寺を訪れているが、句は「寒山落木」明治二十九年春の部に収められている。

「五色が浜」は伊予市郡中の海岸で、公園があり、夏は海水浴で賑わう美しい海岸である。句碑のあるところからはるかに望むことができる。

稱名寺本堂裏の庭園に

蒲殿乃以与く悲し枯尾花

漱石（表）

因や冠者の墓所能落松葉

漱石（裏）

という夏目漱石の二句が表裏に刻まれた小さな句碑がある。

稱名寺のすぐ手前左側にある池の畔にある、「源頼朝」の弟で「範頼」（蒲冠者と呼ばれる）を祀るという小さな祠「鎌倉神社」の前にも、夏目漱石の

蒲殿乃以与く悲し可連尾花

漱石

木枯や冠者の墓撲川松落葉

漱石

の二句が一基に刻まれた句碑が立っている。

79 世の中やひとり花咲く百日紅

子規

伊予市上吾川 県立森林公園管理道

昭和六十年設置

高さ一三三cm・幅二〇〇cm

寒山落木 ①

昭和五十九年に伊予市上吾川の大谷池の南側の山に設けられた「県立森林公園」に建てられた石碑七基、木碑三十三基の文学碑のうちの一基で、駐車場の向こうから山に登る管理道の突き当たりである句碑（石碑）である。碑陰には何の記録もないが、文字は子規の文字ではなさそうである。

80 赤椿さいてもさいても一重哉

子規

伊予市上吾川 県立森林公園一号線

昭和六十年設置

寒山落木(1) ①

前記の句碑のある管理道をしばらく登ると右側に高浜年尾の句碑（石碑）

わが旅の紅葉いよいよ濃かりけり 年尾

がある。この横の道を登って行くと、トリムコースに出る手前に立っている、野球のホームベース型の立て札に彫られた木碑である。途中に、五十崎古郷の

銀杏ちる深空あをを澄みまさり 古郷

という木碑がある。

81 ほろほろと椿こぼるる彼岸哉

子規

伊予市上吾川 県立森林公園第二林間広場

昭和五十九年度設置

高さ一九〇cm・幅一六三cm

寒山落木(3) ② 発句を拾ふの記 ⑬

俳句二葉集 ⑬ 新俳句・春の部 ⑬

前記管理道を登り切ると、「第二林間広場」へ出る。その北の端にある屏風型のコンクリート製の碑に、縦七〇cm、横四〇cmの磨石に標記の句が刻まれてはめこまれている。

前記「赤椿——」の木碑のある道を登り切ったところに、篠原梵の木碑

木犀の香に惜しみてあまりあり 梵

があり、近くに高浜虚子の木碑

馬酔木折つて髪に鬚せば昔めき 虚子

がある。ここを少し登ると「第一林間広場」に出る。この広場の中央東寄りに

花馬酔木揺れやむときのうすみどり 不器男

という芝不器男の句碑（石碑）がある。

この広場の北の端から第二林間広場へ通ずる道の途中に、河

東碧梧桐の

一弁散り一弁朴のほぐれゆく 碧梧桐

という木碑がある。この碑は設置当初は「碧梧桐」と誤っていた。その他に、第二林間広場までに

ひそと青し襟林にあそぶ子は 波郷

茶の花は雄葉の奢日は沈む 草田男

という木碑がある。第二林間広場に入ったところ

焼山に松苗植うる卯月かな

鬼子坊

という木碑がある。

82 青き中に五月つつじの盛り哉

子規

伊予市上吾川 県立森林公園中央線

昭和五十九年度設置

寒山落木(2) ①

第二林間広場の北の端の道を北へたらたらと下りて来ると、

標記の句が板に彫られて枠に吊るすような形で建てられている。

すぐ近くに

咲き満ちてこぼるる花もなかりけり

虚子

という高浜虚子の木碑がある。

この森林公園には前記の碑を含めて、子規四基(内二基が石碑)、虚子四基、霽月・梵・黙禅・波郷・各三基(内波郷二基が石碑)、碧梧桐・古郷・不器男・鬼子坊・東洋城・雷死久・山頭火各二基(内不器男一基が石碑)、草田男・赤黄男・極堂・年尾・西行・節各一基(内年尾・西行が石碑)の木碑がある。

83 追ひつめ多鶴鳩見えず溪の景

子規

温泉郡川内町松瀬川 松山ゴルフ会館

昭和四十九年十一月三日

高さ二〇〇cm・幅三五〇cm

寒山落木(1) ① 山路の秋 ⑬

伊予鉄バスの新居浜行きで「川内営業所」下車、国道十一号

線を新居浜方向へしばらく歩き、法界門橋を渡って、「松山ゴ

ルフ場」の標識のあるところから山の方へ約二kmばかり行くと

「松山ゴルフ会館」が高台にある。標記の句碑はこの「松山ゴ

ルフ会館」の前庭にあり、縦七〇cm、横一一〇cmの磨石に句を

刻んで、はめこんである。碑陰には

子規虚子碧梧桐以来今日まで日本の俳句の伝統はなお

連綿と松山に活きている。

表記の句は「山路の秋」(子規全集未採録紀行文)に

収録されているもの 明治二十四年八月当時東京帝国

大学に在学中であった子規は「そよふく秋風に驚かさ

れて」白猪唐岬の観瀑紀行を思いたち当ゴルフ場の麓

を通過して河之内の近藤家に一泊している。句の前書に

は「川上(今の川内町)より奥は山水の景色は尋常な

らずとある絶壁の下にて」と記してある このゴルフ

場の周辺には今でもその名残りを止める溪の景が各所

に散見できる 俳句のふるさと松山でプレイされた方

々にとつて一つの思い出をつくることができれば望外

のよろこびである。

平田陽一郎誌 河野如風書

とある。松山観光ゴルフ倶楽部社長宮脇先、松山ゴルフ倶楽部理事
長山中義貞の発起で会員一同によって建立されている。

84 追ひつめ多鶴鳩見えず溪の景

子規

温泉郡川内町河之内 白猪滝

昭和五十八年十月

高さ二三〇cm・幅一一〇cm

寒山落木(1) ① 山路の秋 ⑬

伊予鉄バス白猪滝行きで「白猪滝口」下車、バス停から約一
・五㎞ばかり行くと「白猪滝」へ着く。句碑は滝の左側に自筆
の文字を刻んで立っている。子規の句の左に

雲来たり雲去る瀑の紅葉可奈

漱石

という夏目漱石の句が併刻されている。傍らの副碑には

古くから白猪唐岬の二瀑は雄瀑雌瀑と呼ばれ四季を

通じて文人雅客の観瀑が盛んであった。

その中で明治二十四年八月に正岡子規同二十八年十

一月夏目漱石が松山から一日がかりで当地をたずね河

之内の近藤邸で一泊のち観瀑を果たし多くの歌句を

詠んでいる。

時代の移りゆくなかでこの地を訪れた方々がかつて

の子規漱石のように世俗を離れたひとときをここで過

ごされるならば幸せである。

昭和五十八年十月

伊予鉄道株式会社

社長新野進一郎

と記されている。

85 志保ひ加多

隣の国へつゝ支介里

子規

北条市小川粟井坂 大師堂

昭和五十一年三月七日

高さ一七五cm・幅一九五cm

寒山落木(4) ② 俳句二十四體 ④

新俳句 ⑬ 書簡(内藤素行宛) ⑱

病餘漫吟 ⑳ 日本(明治29・1・20)

病餘漫吟 ㉑ 日本(明治29・1・20)

松山市から海岸線(国道一九六号線)を通って北条市へ入っ

てすぐのところにある「海鮮北斗」の向かい側にある大師堂の

前に立つ大きな御影石の句碑である。子規漱石生誕百年を記

念して北条ユネスコ協会十三日会の建立したものである。泉精

一他十八人の名が記してある。子規の句の左側に

釣鐘のうなる許尔登分哉

漱石

という漱石の句が併刻されている。

86 涼志さや馬も海向く粟井坂

子規

北条市小川栗井坂 大師堂

昭和三十四年春

高さ一〇五cm・幅七八cm

寒山落木(1) ① 寒山落木抄 ②①

前記大師堂の右奥に立っている。村上壺天子の揮毫で、小川部落が建てたものである。風早文化研究会刊『風早探訪―北条市の文化財―』には「昭和三十三年建立」とある。

87 涼しさや馬も海向く淡井阪

子規

北条市小川栗井坂 大師堂

昭和四十八年二月二十三日

高さ一三〇cm・幅二五〇cm

寒山落木(1) ① 寒山落木抄 ②①

前記大師堂の左に林関四郎によって建てられた。縦六〇cm・横四六cmの磨石に標記の句を子規の自筆文字で刻みはめこんである。傍らに立つ説明板に

涼しさや馬も海向く栗井坂 正岡子規

昭和三十四年小川部落によって建てられ『寒山落木』

二十九年の部に「淡井阪」と書かれていたので後日別

碑が建てられた

と記されている。しかし、この説明板は「栗井坂」の句碑の

方に建ててあるべきものである。

この句碑の建立時期について、鶴村松一著『伊予路の正岡子規文学碑遺跡散歩』には「昭和四十九年六月四日」とある。

境内にはこの他に、大森春恕の句碑

淋しさを鳴さへ逃天うらの輝 春 恕

があり、道路をへだてた向かい側の、「栗井」の地名の起源となった「井戸」の傍らに、村上壺天子の句碑

粟能井や處こ夏の海与里乃風 壺天子

釈学信の歌碑

すめる世にまたも阿わ井の水ならば

たち帰り来てか希うつさまじ 釈学信

がある。

88 三坂望松山城

敬危小径破晨行松樹肅森

絶世情独停竹筇回首望白

雲湧處是松城 子規作 六六庵書

上浮穴郡久万町三坂 三坂峠ドライブイン

昭和三十六年十月三十日

高さ一五〇cm・幅一一〇cm

同親会温知社吟稿 ⑨

国道三十三号線の三坂峠にある伊予鉄の「三坂峠ドライブイン」の左横の崖縁に道後平野を背にして建ててある。書家小原

六六庵の揮毫になる文字を刻んである。詩の第一字目は『子規全集』をはじめとして多くの参考書では「敬」と記されている

が、碑面には「敬」と刻まれているように思うがどうだろうか

「敬危」は「傾いて危ない」の意であり、「敬危」も同じ意味である。前掲鶴村松一著『伊予路の正岡子規文学碑遺跡散歩』

には「菊」となっているが、これは誤りである。

漢詩の読みは

敬危たる小径晨を破りて行く

松樹森として情を絶つ

独り竹筥を停め首を回らして望めば

白雲湧く処是れ松城

である。

子規が明治十四年、太田正躬、武村鍛、三並良と久万・岩屋寺を訪ねたときの作である。

句碑は、当時の久万公民館長太田正志の発起で、子規六十年忌を記念して建立された。

ドライブイン右側の駐車場の中に、種田山頭火の句碑

晴れたり曇つ多里酔う多利覚めたり秋は行久 山頭火

三坂峠

秋風あるいてもあるいても

がある。また「四国スキー発祥之地」という記念碑の碑陰に

スキー担ぎ峠越えれば雪能山

という奥島団四郎の句が刻まれている。

89 夏の日能

ひえてし多ゝる岩間可な

子規

上浮穴郡久万町直瀬 古岩屋公園

昭和五十七年九月十九日

高さ一一〇cm・幅四〇cm

寒山落木拾遺

③ しゃくられの記 ⑬

伊予鉄バス「久万営業所」から岩屋寺行きで「古岩屋」下車「国民宿舍岩屋荘」の右手から谷間の道をしばらくたどると、

左側に標記の句碑がある。傍らの木製の説明板に

正岡子規碑

夏の日のひえてしたゝる岩間かな

子規

村上壺天子 書

正岡子規（一八六七—一九〇二）享年三十五歳

松山市生まれ、俳人、歌人、本名常規、幼名升別号

子規・近代俳句革新の旗手、大原観山に漢学、河東静深に漢詩の添作を受く上京して小説家を志すが韻文に

転じ「俳句分類」に着手、日本新聞社に入り、俳句、短歌革新に活躍するがカリエスのため生涯病床生活を

余儀なくされた。「ホトトギス」「日本」などに写生

文を唱導した論陣をはり、近代文学に影響を与えた。

子規が当地に來遊したのは明治十四年と二十三年の

二回であつて句碑の句は明治二十三年八月十九日発句

のものである。ここに子規の古岩屋来遊と子規八十回忌を記念して句碑を建立するものである。

昭和三十七年九月十九日子規忌

とある。久万町有志他によって建立されている。

古岩屋公園の入口に、碧梧桐の句碑

一軒家も過ぎおちばする風のまゝ尔行く

があり、子規の句碑の近くに、谷野予志の句碑

磐石のどの深さまで凍ゆるむ

がある。

90 夏山や四十五番は岩屋寺

子規

上浮穴郡美川村竹谷 岩屋寺

昭和三十三年

高さ一二〇cm・幅七〇cm

俳句稿 ③

伊予鉄バス久万営業所から、岩屋寺行きで「岩屋寺」下車、

四国八十八ヶ所四十五番札所「岩屋寺」の本堂へ上がる石段の左側に立っている句碑である。

子規は

夏山や五十二番は岩屋寺

と「俳句稿」(明治三十一年)に記してあるが、これは子規の思い違いで(「四十五番」では音感が悪いのであえて「五十二

番」としたと考える人もあるようだが)、柳原極堂が揮毫するときに「四十五番」と修正したものである。新合善三郎らによって建立された。

子規は前掲の漢詩「三坂望松山城」を作ったときと、前記の「夏の日の——」を詠んだときの二度、岩屋寺に参詣している。

境内には、他に

海岸山諸仙たゝ江る靈鳥の

こえに明けゆく法のあけぼの 本山雲彬

峰々は犬荘殿能佛菩薩纏、説法す深川の聲 伊藤窟人

洞中の弥陀尔秋能西日さ寿 伊藤窟人

といった句・歌碑がある。

91 蓬萊能松の茂りや鶴百羽

子規

新居浜市松原町 合田一系邸

昭和四十一年

高さ一三〇cm・幅一一〇cm

俳句稿以後 ③ 仰臥漫録 ⑪

日本(明治35・7・24)

JR新居浜駅から瀬戸内バスの山根グラウンド(打除)行きで「松原」下車、「金正鋳店」の角を入れて五〇〇mばかり行ったところにある「泉川保育園」の前に合田邸がある。句碑は玄

関前右にあるが、文字が句碑としてはやや小さく、彫りも浅いので少し見にくい。最近、緑のペイントで墨入れしてあるので見やすくなったが、緑色はあまりそぐわない感じである。

子規の句の左側に

釣鐘のう奈る許尔壑分哉

漱石

と、夏目漱石の句が併刻されている。子規漱石極堂生誕百年を記念して合田一系が建立したものである。

合田邸には他に、玄関前に

萩すゝき一系千代のす可た可な

極堂

分け付けば道はありけ里すゝき原

極堂

裏庭に

羽子板の重きが嬉し突かて立つ

かな女

鶴啼くや桜はややに陽をふくみ

かな女

光栄の御座所おぼろの月に侍し

一系 (燈籠)

伊豫路奈る殿下に言上花の窓

黙禪

すめら御國は野中の梅の

咲いた花から春が来る

雨情

があり、袖珍石に刻まれた

一系庵に車を寄せて五月晴

黙禪

がある。

新居浜市一宮町 一宮神社社務所庭

昭和四十一年秋

高さ一七〇cm・幅二二〇cm

寒山落木(5) ② 日本(明治29・8・5)

一宮神社の社務所裏の庭に立っている句碑である。子規の句を中央にして右に

風仁聞け何れ可先尔散る木の葉

漱石

左に

一の宮にて

樟千年神さびをはす宮の秋

極堂

と三人の句がいずれも自筆の文字で、併刻されている。子規・漱石・極堂の三文人生誕百年記念に矢野樟坡が建立したものである。子規の句は明治二十九年夏の作である。

境内には

南無三宝小女郎狸憑きたる桜鯛

狸通

遠会釈うつしく誰だろう

伍健

かゝやきて神奈可ら奈る樟若葉

風生

花守や登可免可ましき咳者らひ

固堂

百千鳥江湖に名有る樟乃宮

黙禪

秋高し神木として一の樟

樟坡

みな神に奈れとや神の守り介ん

神のミすゑ能たねに志あ礼ハ

欣二

千早振神の鏡や三代嶋の

子規

92 童ら能蟬さし尔くる社可那

春宮能社ここ尔う津して

東福亭笑門

などの句・歌碑がある。

という歌碑がある。

皆大山祇に礼して這入る

93 武蔵野に秋風吹け波故郷の

新居乃郡能芋をしぞ思ふ

子規

新居浜市角野町 別子銅山記念館下

昭和三十六年九月十九日

高さ一四〇cm・幅一三〇cm

竹乃里歌 ⑥ 日本(明治32・10・21)

JR新居浜駅から瀬戸内バスの山根グラウンド(打除)行きて

「山根グラウンド」下車、国領川に沿って約二〇〇mばかり行く

と、大山積神社の下にある別子銅山記念館への入口の下にこの

歌碑がある。

碑陰に

子規忌六十週年をトし郷土に由縁の此の歌碑を建立し

て記念とす

とある。新居浜地方子規歌碑建設会の建立である。

短歌は明治三十二年の作で、新居浜・西条地方の名産であつ

た里芋の味を故郷の味として懐かしんだ歌である。文字は極堂

の揮毫になる。

別子記念館への登り道の右側に、川田順の

地中にてはたらくことは慣れなから

94 世の人は四国猿とぞ笑ふなる

四国の猿の子猿そわれは

子規

伊予三島市富郷町 戻り嶽前

昭和五十四年六月

高さ一二二cm・幅一〇〇cm

竹乃里歌 ⑥ 日本(明治31・8・21)

JR伊予三島駅から瀬戸内バスの別子山行きて「富郷キャン

プ場」下車、バス停のすぐ近く、右側の一段高くなったところ

に磨石に刻まれて立っている。

明治三十一年の作で、「われは」と題する八首のうちの一首

である。

すぐ近くに

絶壁の水が経よむ観世音

伍健

という川柳碑がある。

95 寒椿黒き佛に手向け者や

川之江市川滝町下山 常福寺(椿堂)

昭和四十六年三月

高さ一〇〇cm・幅二五cm

寒山落木(4) ② 病餘漫吟 ⑲

JR川之江駅またはJRバス上分駅から阿波池田行きはJRバスまたは瀬戸内バスで「椿堂」下車、「椿堂」の標識のあるところから約一〇〇m入ったところに、通称「椿堂」と呼ばれる四国八十八ヶ所の番外札所である「常福寺」がある。

子規の句碑は、当初、正面の大きな蘇鉄の根本にあったが、本堂改築後、庫裏の玄関前に移されている。句は明治二十八年冬の作であるが、特にこの常福寺にゆかりがあるというわけではない。子規が常福寺を訪れた形跡もない。

前任職の石川椿(東予市在住)が俳句を嗜み、句碑建立に心が深かったので、在任当時に多数の句碑を境内に建立しており、

境内にお杖椿や南無大師

まかゝやく椿の花に合掌す

名月や滴るとき椿の葉

秋の暮かどに風呂焚く山家哉

小でゝむし大でゝむしに堀長く

風鈴の一つ鳴りたる涼しさよ

二代目のしだれ桜や巳酉年

子規

一系	正一郎	龍子	極堂	黙禪	虚子
二句	一基				

帯の目の美しかりし花の影 づる女

梅の月一枚のこす雨戸かな 一茶

法会あり村にひろがる花の鐘 椿

二洲碑にかぶさる松の下涼し 文二郎(正面) 二句

月の出に残らで光る草の露 杜白(左側面) 一基

がある。本堂改築前には

はるかすみ浮かぶや花の椿堂 たん右

こゝにまた逢ひし通路の親しけれ 暁石

という句碑もあったが、現在は撤去されている。

96 可ら鮭や

市耳かく連天貧に処す

子規

南宇和郡城辺町矢野町 諏訪神社

昭和六十二年十一月三日

高さ一三二cm・幅六二cm

俳句稿 ③ 新俳句 ⑲

春夏秋冬 ⑱ 書簡(河東兼五郎宛) ⑲

日本(明治31・1・16)

宇和島市から城辺町行きの宇和島自動車・JRバスで「城辺営業所」下車、一五〇mくらい御荘の方へ引き返した右側にあり「諏訪神社」の石段下左側に立っている六角柱の句碑で、六面のうちの一面に縦一一cm、横二三cmの額をとって、子規の

自筆文字で刻まれている。

「から鯉」は「乾鯉」で腸を除いて陰干しにしたサケのことである。この子規の句も特にこの地にゆかりがあるわけではないし、子規がこの地を訪れた記録はないようである。

子規の句の右側面は漱石の句で、竹の絵を添えて

竹一本葉四五枚に冬近し

漱石

と刻まれている。その右が

泳ぎ女の葛隠るまで羞ぢらひぬ

不器男

次が、上に色紙型の枠をとって

時鳥川上へ啼移る朝乃窓あけて居る

と、その下に開いた扇を横にして、その中に

趣在有無間

碧

という碧梧桐の句と詞が刻まれている。

その次が東洋城の句で

う多是連天孤高をかしや楼二月

東洋城

その右が、上に色紙型の枠をとって

蝶墜ちて大音響の結氷期

赤黄男

と、その下に短冊を弓なりに描いて、その中に

裸体仏か奈しきものゝかくれも奈や

赤

と、赤黄男の句が刻まれている。

碧梧桐の句と詞の下に

我が文化の先人を頌徳しご当地の更なる発展を祈念し
て本碑を建立す

と「建碑趣旨」が記されている。松山市在住の拓本研究家福岡治直が建立したものである。

おわりに

平成二年一月二十日現在で、私の知り得た県内にある子規の文学碑は、木碑等を含めて、以上の九十六基が数えられる。あるいはまだ私の知らない碑がどこかにあるかもしれないが、これで一応私の知り得た子規の文学碑の全てを紹介したわけである。(県外の碑については「子規会誌」三七号・三八号・三九号参照)。

今回の拙稿は、平成元年十一月の「子規会例会」でスライドによって紹介したものを文としてまとめたものであるが、いざ活字にするとなると、正確を期さなければならぬ。もともと私が文学碑と深いかかわりをもつようになったのも、失礼だが先輩達の過去の記録に不正確なものがかなりあることに気付き、これをより正確なものにしようとしたことにある。しかし、これは実際にはかなり困難なことであって、このような動機で实地に調査し、記録をしている私自身の記録にも、改めて見直ししてみるとかなりの誤りが出てくる。(例会の席で配付した資料「正岡子規の文学碑」にも何箇所かの誤りがあるので、お手持ちの方は恐縮だが、本稿を参考に訂正されたい。)それで改めて疑問のある碑については可能な限り現地で再調査した。今回も、現地へ行ってみると、「杖の淵公園」の「ていれぎ」

の句碑のように、現在は撤去されているものがあつたり、あるいは位置が移動していたりしたのもあつた。また、記録をワープロを使って整理しているために生じた誤りもあつた。本稿ではこのようにして、できる限り正確を期したつもりだが、なにか専門的知識に欠けるため、まだ不正確な記録があるかもしれないので、お気付きの点があればぜひ御教示いただきたいものである。

県内の碑についてはすでに何冊も優れた参考書が刊行されているので、句の解釈等は全て省略した。また、句の背景、建碑の背景等についても、できるだけ案内板・説明板・碑陰の記録の範囲にとどめた。引用した案内板・説明板・碑陰の記録はできるだけ原文に従つたが、「俳句の里」の「案内板」については共通した部分（子規の生存期間・松山市教育委員会）と、ふりがなは省略した。また、見出しの句・歌の表記は、碑面の刻印に従つたので、変体がなどによる表記は読みづらいつころもあろうが、判読されたい。なお、文中の人名については失礼ながら全て敬称を省略した。御了承いただきたい。出典文献のあとの○の中の数字は講談社刊『子規全集』の巻数を示す。

余談にわたるが、昨年文学碑調査のため上京した際に、根岸の「子規庵」を訪ねた。水曜日しか公開されていないので、わざわざ日程をあわせて行つたのだが、邸内にある寒川鼠骨の句碑の写真を撮影しようとしたところ、「撮影禁止である」とのこと拒絶された。どのように事情を説明し、頼んでもガムと

して許可してもらえなかった。やむをえずあきらめはしたものの、非常に残念であつた。全国各地の碑を見て廻っているが、公開されている場所、このような扱いを受けたの初めてであつた。子規関係の研究とともに、鼠骨の業績を伝える意味においても何とかしてもらいたいものである。ぜひ子規関係などかかるべき機関から善処されるよう働きかけてもらいたいと思う。

主な参考資料

*い志ぶみ子規 増補三訂版 いしぶみ同好三人会編

*いしぶみ子規以降 いしぶみ同好三人会編

*伊予路の正岡子規文学碑遺跡散歩 鶴村松一著

*子規全集 各巻 構談社刊

*俳句の里松山 松山市教育委員会編

(森元四郎著)

*伊豫の碑 三好湧川編

(会員) (平成元年十一月例会講演)

追 録

足なへの病いゆとふ伊予の湯尔

飛びても行かな驚尔あらませ者 子規

松山市道後湯の町 ホテル谷屋 男子浴場

昭和 年 月 日(不詳)

縦六二cm・横五五cm

竹乃里歌 ⑥ 日本(明治31・8・6)

子規博物館の前にあるホテル谷屋の男子浴室の壁面にはめこまれていた。

女子浴場には、縦七三cm、横一二cmの短冊型の石に

春風やふね伊予に寄りて道後の湯 極堂

と、同じく縦七二cm、横一二cmの短冊型の石に

寝ころんで蝶泊らせる外湯哉 一茶

と刻んで、並べて壁面にはめこんである。

春や昔十五万石の城下かな 子規

松山市道後鷺谷町 宝荘ホテル

昭和六十三年四月

高さ一一三cm・幅七四cm

寒山落木(4) ② 病餘漫吟 ②①

宝荘ホテルの正面玄関の左内側に宝荘主人宮崎春近(陽允)によって標記の句碑が建立されている。

右側には宮崎春近の

この籠も橋眺むらん初湯かな 春近

という句を刻んだ高さ七四cm、幅四三cmの句碑がある。傍らの

説明板には

昭和六十三年(辰年)正月瀬戸大橋開通を目前にして

漱石も入ったと云う道後温泉二階で初句会が催され

した。その時当館主が詠んだ

”この籠も橋眺むらん初湯かな“

がNHKに採用され正月二日全国放送された句です。

辰年に瀬戸大橋開通で四国発展の兆となれば誠に幸で

す。 館主敬白

とある。

興居嶋へ魚舟いそぐ吹雪哉 子規

松山市高浜一丁目 黒岩口バス停横

平成元年九月?

高さ一七〇cm・幅一七三cm

寒山落木(1) ①

伊予鉄高浜線の梅津寺駅と高浜駅の間、高浜線の上にかかる昭和橋の改修が平成元年九月に完成した。この橋の畔にある「伊予鉄黒岩口バス停」の横に標記の句碑が建立された。碑陰に建立年月日や建立者等の記録はないが、この橋の完成を記念したものでなからうか。

「寒山落木巻一」の「明治二十五年終わりの冬」の部の、

内川や外川かけて夕しぐれ

のすぐ後に収められている。

県外追録

病苦 林檎くふて牡丹の前死ん哉

東京都葛飾区龜有五丁目 見性寺

昭和三十三年十二月

高さ一六五cm・幅三九cm

俳句稿 ③ 牡丹句録（子規病中記） ⑫

ホトトギス 32・8・15（述懐）

常磐線「亀有駅」の北口を右へ出て、環七通の交差点を渡り、五〇mばかり行った左側に「見性寺」がある。

門を入ったすぐ左にある鐘楼の前に標記の句を子規の自筆の文字で刻んだ、先の尖った自然石の句碑が立っている。

碑陰には

明治卅二年九月子規先生在根岸庵書賜之愛護既久今茲為

先生菩提同謀関根山草師刻石建見性寺境内

昭和卅三年冬十二月 八十二若尾瀾水

とある。

若尾瀾水は子規の門下生であるが、子規の没後、「木兔」に発表した「子規の死」の内容に問題があったため、日本派俳壇から追放されている。しかし「子規会誌39号」に紹介したように、高知県春野町にある若尾家の墓地に建っている瀾水の長男脩一郎の墓に子規の句

驚の子能免をつ可む霞可那

が刻んである。

子規の句碑の左右には三基の句碑がある。

墓地へ入ると、寒川鼠骨の墓がある。高さ七八cm・幅三一

五cmの墓碑に縦六五cm・横二四cmの額をとって、

鼠骨庵法身無相居士

南山不可得

と刻んである。昭和三十三年忌日 寒川朝康によって建立されている。俳句などは刻まれていない。

礎石の正面に

略歴遺稿

寒川陽光 明治八年十月伊与松山三番に生る。明治廿六年第三高等学校ニ入学。卒業せず退学。蓋し子規居士大学を中退し次で碧梧桐と虚子と亦□才学校を中退せしに因る。卅年一月大阪朝日新聞記者。子規居士と交遊し俳句和歌に精進し夙に写生文に一家を成す。

「日本及日本人」に従事し「日本」俳句の選者とし亡国の秋に至る。著書多く「新囚人」「写生文作法」「贈答俳句集」「俳文作法指南」「断霜録」「柿の帯」「寒川鼠骨集」「歳時記例句選」等々以下啓蒙的著述四十餘種に及ぶ。子規の旧盧を守ること五十年。

と刻んだ縦二八cm・横三三・五cmの銅板プレートがはめこんである。

規

花咲以て思ひ出春人皆遠し

栃木県今市市吉沢 高橋平三郎邸

昭和四十年頃

高さ一九七cm・幅三〇cm

子規

寒山落木(5) ②

今市市役所の近くにある高橋平三郎邸の、裏庭左手奥にある土蔵の横に門柱型の碑が一对立っている。向かって左側の碑に、窓に見る奈がめあらはに冬寂びて

たゞありがたき日のひかりかな 牧水

という、若山牧水の短歌が刻まれている。その裏面に標記の子規の句が刻まれている。

右側の碑には

炎天にさへぎるものもなく鳴ける

ふるさとの町の雨かへるかも 比庵

と清水比庵の短歌が刻まれており、その裏面に

初冬の竹緑なり詩仙堂 鳴雪

と内藤鳴雪の句が刻まれている。

(寺内恒夫著『文学碑の旅―栃木県上巻』には勘違いであろうか、子規の句が比庵の歌碑の裏に、鳴雪の句が牧水の歌碑の裏に刻まれているように記録されている。)

高橋平三郎氏は、石油製品・肥料などの販売会社の社長で、

文芸・書画などを好まれ、邸内にはこの他に

かまつ可のしたてるまどにひらつきて

よをあさけらむとこころも奈し 秋艸道人

萬里江南雪 一花天下春 秋艸道人

晴好雨奇 比庵

と刻んだ道標他、二基の歌碑が建っている。

清水比庵(秀)は岡山市出身で、日光町長をつとめた歌人である。

正岡子規句碑

芋坂も団子も月のゆかりかな

東京都荒川区東日暮里五丁目 羽二重ビル 羽二重団子前

昭和六十三年

高さ一八七cm・幅一一〇cm(縦七九cm・横二四cm)

寒山落木(3) ②

JR山手線日暮里駅の南口を右に出て股線橋を下りたところを右へ約二五〇mばかり行ったところにある、文政二年創業の老舗「羽二重団子」の右横を通る「芋坂」に面して自然石に標記の句を刻んだ短冊型の磨石のはめこまれた句碑が、「羽二重団子」の当主によって建てられている。文字は子規の字ではない。

傍らにある説明板には

正岡子規と当店

子規居士が上根岸八十二番地に居を構えたのが明治二十五年である。爾来亡くなる明治三十五年までの十年間随分ご愛顧を頂いたと当店四代目は伝える。

『仰臥漫録』から明治三十四年九月四日の日記を抜粋すると

『芋坂団子を買来たらしむ(これに付き悶着あり)あ

編集の窓

ん付三本焼一本を食う」とある。多分悶着とは妹の律さんと当店の団子のことで言い争いがあったのであろう。旺盛な食欲が日記から推察でき死を目前にした子規居士の人間味を髣髴させる。

観月会

芋坂の団子の起こり尋ねけり

根岸名所ノ内

芋坂の団子屋寝たりけふの月

短歌会第四会

芋坂の団子売る店にぎはひて

団子くふ人団子もむ人

俳句稿卷一より
子規歌集より

と記されている。

店の前に立ててある「団子の由来」を記した案内板にも、その最初

芋坂も団子も月のゆかりかな

子規

と記してある。店の中には子規自筆のこの句の短冊が飾ってある。

この「芋坂の団子」は「羽二重団子」として有名であったように、子規の「道灌山紀行」、漱石の「我輩は猫である」にも「芋坂団子」が出て来る。現在もかなり人気があるようである。

出版

子規に俳句を学ぶ 立川淳一 近代文芸社発行 一、七〇〇円

遙かなる子規 天岸太郎 近代文芸社発行 B6版 二七六ペー

ジ 一、八〇〇円

論文

大正俳句物語③虚子の俳句復活 戸栗ちかし 「風涛」 平成元年五月

五月

俳句随想(1)虚子雑感 園田芳夫 「椎の実」 平成元年六月

虚子辞典稿12 本井英 「惜春」 平成元年六月

「虚子忌」(加福無入)鑑賞花の旅つづく 前川善道 「ひいらぎ」 平成元年六月

き」 平成元年六月

虚子の面影 明治三十六年・三十歳(虚・碧对立時代のきざし)

〜〜 赤堀五百里 「裸子」 平成元年七月〜九月

道(71) 虚子先生の日常生活(星野立子先生の生い立ちと玉藻の歴史) 今井千鶴子 「玉藻」 平成元年八月

歴史)

子規会報 四十八号

発行日 季刊(四、七、一〇、一月)
平成三年一月十九日

発行所 松山市末広町正宗寺内
郵便振替 徳島二一八六八

印刷所 松山市東長戸二丁目一三九

あなたも“心のふるさと”を訪ねてみませんか

四国八十八ヶ所巡拝

発心した月から一年でおまいりできる

日 曜 遍 路



伊予鉄道株式会社

〒790 松山市湊町4-4-1

観光課 ☎ (0899) 48-3111

松山を代表する

銘菓「子規」・醤油餅

松山市道後湯之町商店街

巴堂本舗

TEL 0899 (41) 3452

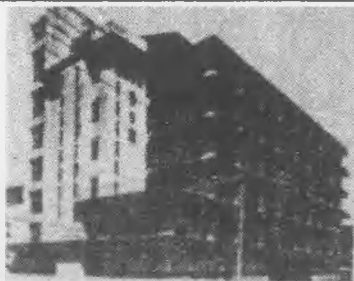
会議・御会食をホテル春日園へ
四季の移り変わりを楽しめる露天
岩風呂で一句ひねってみませんか。

政府登録国際観光旅館

春日園

ホテル

〒790 松山市道後鷺谷町3-1
☎ (0899) 41-9156



お食事処…かすが…

石畳、格子戸、木の香もかぐわしく
くつろぎのときに情緒ひとしお

<新刊紹介>

『一粒米』 増補再版 発売
盲天外 森恒太郎著 B6判 338頁 上製 3,000円
ケース入

自費出版

ご相談ください。

印刷 & 出版

(有) 青葉 図 書

〒790 松山市小栗6丁目3-23 ☎ (0899) 43-1165

¥300